

青田川柳とエズラ・パウンド —メトロの発句と地下鉄の比較研究—

Aota Senryu and Ezra Pound: A Comparative Study of Metro Hokku and Metro Senryu

平 辰彦

TAIRA Tatsuhiko

Abstract: The purpose of this study is to consider Ezra Pound's metro hokku and Senryu Aota's metro senryu from the perspective of comparative poetics.

I will explore metro senryu written by the sixteenth Senryu, Aota Senryu (1928-2018) who was strongly inspired by Pound's 'In a Station of the Metro'

女棲む胸に地下鉄ぶらさげて

(in a heart filled with women a metro line dangles)

[trns: Andrew Houwen]

This metro senryu was first presented as an experimental work at Tokyo Senryu Association in April 1995. This metro senryu has received a lot of attention for its similarity to Ezra Pound's 'short poems'.

Together with the cows' mandolins poem this contemporary senryu is considered one of Aota's best.

The cows' mandolins poem was presented in 1958, but in October 1956, Iwasaki Ryoza's translation of a selection of Pound's poetry was published by *Arechi*. One of Iwasaki's translations was one of 'In a Station of the Metro'.

This 'metro hokku' was written in two lines with Pound's technique of 'super-position': in Aota's 'metro senryu', he tries to employ this 'super-position' in one line.

In Aota's poem, two images are arranged next to each other, the 'heart filled with women' and the 'metro line dangling', employing an imagist 'super-position'. The 'metro' in particular recalls that of Pound's 'metro hokku', 'In a Station of the Metro'. The faces of various women of the past reside in Aota's heart.

In Aota's 'metro senryu', both Pound's 'super-position' and Aota's 'senryu vectorism' appear. In the senryu, the horizontal vector of the metro and the vertical vector of the 'dangling' cross over. In the 'heart' where they cross over, the unforgettable, 'women' always remain. The various faces of these 'women' momentarily appear, then disappear. Aota's heart is disturbed and shaken by their appearance; Aota expresses this inner state through the metaphor of the metro line 'dangling', thus depicting his 'inner landscape'.

Aota was strongly inspired by Pound's 'In a Station of the Metro' and wrote his 'metro senryu' in response.

Keywords: Ezra Pound、イマジズム、青田川柳、短詩、重置法、モダニズム

はじめに

本稿は20世紀を代表するアメリカの詩人エズラ・パウンド(1885 - 1972)の「イマジスト」(Imagist)の「短詩」として知られる「地下鉄の停車場にて」(In a station of the Metro)が日本の「発句」(*hokku*)の英訳から、どのような影響を受け、それが日本の「短詩」である16世川柳宗家 青田川柳(1928 - 2018)¹の「モダニズム」(modernism)の現代川柳にどのような影響を与えたのかを、融合文化の一例として日本の「モダニズム」の現代川柳の「短詩」とアメリカの「イマジズム」(imagism)の現代詩の「短詩」を比較詩学の視座から考察したものである。

I エズラ・パウンドの「メトロの発句」と荒木田守武の「発句」の英訳について

エズラ・パウンドは1914年9月1日にロンドンの『ザ・フォートナイトリー・レビュー』(*The Fortnightly Review*)に「渦巻主義」(Vorticism)と題する重要な論文を発表する。そこには戦国時代の伊勢神宮の神官で俳諧師であった荒木田守武(1472 - 1549)の次の発句が2行形式で英訳されている。

落下枝にかへると見れば胡蝶哉

The fallen blossom flies back to its branch:

A butterfly.

この発句は世阿弥(1363 - 1443)の時代の能『八島』の「落花枝に帰らず、破鏡ふたたび照らさず」に拠ったものである。パウンドはこの発句を日本のイマジズムの「短詩」の例として挙げている。

この発句のパウンドの英訳では「散る花」と「舞う胡蝶」という異質のイメージが重ねられ、「枝に帰る散った花」は実は胡蝶だったという一種のメタファー(隠喩)になっている。

この発句は日本では「胡蝶」と「花」の見立ての奇抜さで知られており、そこには川柳にみられる「機知」(wit)も認められる。

パウンドはこうした守武の発句からイメージを二つ重ねる「重置法」(super-position)と呼ばれるイマジズムの詩の技法を発見し、次の2行詩の「地下鉄の停車場にて」を発表した。

The apparition of these faces in the crowd;

Petals on a wet, black bough. ²

亡霊 群衆の中にあるさまざまな顔の、

花辨 濡れた黒い枝の上の。³

(岩崎良三訳『パウンド詩集』1956年)

このイマジズムの「短詩」は巴里のコンコルドの「メトロ」の駅で「群衆」の中から「亡霊」のように「さまざまな顔」を見て作られた「短詩」である。パウンドによれば、この「短詩」は最初30行ぐらいの長さの詩であったものを6ヶ月後には半分の長さにし、さらに1年後に

発句のような2行の「短詩」に仕上げたといわれている。この「短詩」は一行目の終わりに「セミコロン」をつけ、二つのイメージが重ねて表現されているのである。

このパウンドの「重置法」を用いた「地下鉄の停車場にて」は戦後の現代川柳に大きな影響を与えた。

II 16 世川柳宗家 青田川柳の「モダニズム」の川柳とパウンドの「重置法」

16 世川柳宗家の青田川柳は戦後、川柳宗家を意味する川柳を嗣号する以前は師である 14 世川柳 根岸川柳から「煙眉」という雅号を授けられた。当時、青田川柳は牛乳店を営んでいたため根岸川柳は「ミルク・ボーイ」の「M. B.」の頭文字に漢字をあて「煙眉」と命名した。この時代、青田川柳は東京川柳会の同人で詩人であった山村祐（1911 - 2007）から西脇順三郎（1894 - 1982）の『超現実主義詩論』（1929 年）や『シュルレアリスム文学論』（1930 年）を読むように勧められ、西脇の著作を熟読し、西洋のシュルレアリスムの影響を強く受け、1958（昭和 33）年 11 月に川柳新書（第 38 集）『青田煙眉集』を刊行した。この巻頭言で青田は「最近、ダリに似てきたと言はれるが、観念を超現実によってたえず壊して行く批評精神では（中略）現代の危機を描ききれないと思う。」と述べている。

この巻頭言には「観念を超現実によってたえず壊して行く批評精神」というフレーズがあるが、この「超現実」という語には青田が愛読していた西脇順三郎の『超現実主義詩論』の影響が強く認められる。西脇順三郎の著作を通して青田は西洋のシュルレアリスムの芸術論を学んだのである。こうして、創作されたモダニズムの川柳が「牛のマンドリンを聞く騎兵一秋の胃」という作品である。

青田がこうしたモダニズムの川柳を発表した 2 年前の 1966（昭和 31）年には、西脇順三郎の弟子の岩崎良三（1908 - 1976）が荒地出版社から『パウンド詩集』を刊行しており、青田は山村祐にこの本を借りて『パウンド詩集』に収録されている「地下鉄の停車場にて」を読んでいたと考えられる。特に「牛のマンドリン」という表現にはパウンドが発句の翻訳から発見したイメージを二つ重ねる「重置法」（super-position）と呼ばれるイマジズムの詩の技法が認められる。

このモダニズムの川柳である「牛のマンドリン」は、西脇順三郎の『シュルレアリスム文学論』で述べられている「連想上遠く離れてゐるものを二つ連結させる状態を構成する image」で造型されていると考えられる。

パウンドはこのイメージという語を「瞬間のうちに知的・情緒的複合を表現するもの」（An Image is that which presents an intellectual and emotional complex in an instant of time.）と定義している。

III 岩崎良三訳「地下鉄の停車場にて」と青田川柳の「地下鉄の川柳」

では、岩崎良三の翻訳した「地下鉄の停車場にて」と青田川柳の「地下鉄の川柳」を比較詩

学の視座から比較し、青田川柳がパウンドの「短詩」からどのような影響を受けたのかについて考察してみよう。

岩崎良三の訳した「地下鉄の停車場にて」はパウンドが発句の翻訳から発見した「重置法」の手法が強く意識された翻訳になっている。

まず一行目と二行目の冒頭には、「亡霊」(apparition)と「花辨」(Petals)が並置されている。一行目では「群衆の中にあるさまざまな顔」(these faces in the crowd)が、まるで「亡霊」のように浮かび上がって見える状況が描かれている。

この一行のイメージは「客観的なイメージ」である。続く二行目の「濡れた黒い枝の上の」(on a wet, black bough)と「花辨」(Petals)のイメージは「主観的なイメージ」で作者の「心象風景」を描いており、「濡れた黒い枝の上の」(on a wet, black bough)「花辨」(Petals)のイメージには、ほのかな「エロティシズム」が感じられる。

パウンドの「地下鉄の停車場にて」のイマジズムの「短詩」にはこの1行の「客観的イメージ」と2行目の「主観的なイメージ」の二つの異質のイメージが重ねられており、「外的なイメージ」が「内的なイメージ」に転換されている。

エズラ・パウンドの「地下鉄の停車場にて」の影響を受けた青田川柳のモダニズムの川柳を次にあげてみる。⁴

女棲む胸に地下鉄ぶらさげて

(in a heart filled with women a metro line dangles)

[trans: Andrew Houwen]

このモダニズムの実験的な川柳にも「女棲む」と「胸に地下鉄ぶらさげて」という二つのイメージが並列されており、パウンドの「重置法」の手法が認められる。

「女棲む」のイメージは「主観的なイメージ」で作者の「内面的なイメージ」を表現している。一方、「胸に地下鉄ぶらさげて」は「客観的なイメージ」で「外面的なイメージ」である。この二つのイメージが重ね合わされると、新しい「ひとつのイメージ」が誕生するのである。

さらにこの「地下鉄の川柳」では青田川柳の提唱する「川柳ベクトル論」が展開されている。

「川柳ベクトル」論の視座からこの「地下鉄」の川柳を分析すると、「水平方向のベクトル」を示す「地下鉄」と「垂直方向のベクトル」を示す「ぶらさげて」が「胸」で交差される。この二つの「ベクトル」が交わった「女棲む」「胸」ではまるで「亡霊」のように「さまざまな顔」の「女」たちが浮びあがっては消えていくのである。

青田川柳の「胸」はこうした「さまざまな顔」の「女」の「亡霊」にかき乱され、揺れ動いているのである。青田川柳はそうした作者の心理状態を「胸に地下鉄ぶらさげて」という独自のモダニズムのイメージで表現し、自己の「心象風景」を描いているのである。

青田川柳のモダニズムの川柳は言葉と言葉の関係性に注目し、全体を「モチーフ」「構造」「イメージ」の三つ要素で構成されている。この三要素の中のイメージはパウンドの定義した「瞬間のうちに知的・情緒的複合を表現したもの」である。

青田川柳は「川柳ベクトル論」を展開しながら、エズラ・パウンドのイマジズムの「重置法」を用いたモダニズムの川柳を探究するも、2018（平成30）年5月4日、逝去。享年91歳。

青田川柳は川柳作家としてパウンドのイマジズムの「短詩」を通してイマジズムの川柳を生涯探究した川柳宗家であり、川柳作家であったといえる。

おわりに

エズラ・パウンドの「メトロの発句」と呼ばれる「地下鉄の停車場にて」と青田川柳の「地下鉄の川柳」には以下のような共通点がみられるので最後にあげておきたい。

- (1) 詩形が極端に短い「短詩」であること。
- (2) 二つの異質なイメージを並置する「重置法」が用いられていること。
- (3) 「視覚的・絵画的なイメージ」に重点が置かれていること。
- (4) イメージとイメージの関係性に「飛躍」があること。
- (5) 言葉に「省略」と「凝縮」が認められること。
- (6) 口語発想の「自由なリズム」(free verse) が用いられていること。
- (7) 比喩表現を用いてモダニズムの「ポエジー」(詩情) を創造していること。
- (8) 両者の「短詩」には「すべてを一新する」(‘Make It New’) という＜革新的精神＞が認められること。

上記の特色をもつ十六世川柳宗家 青田川柳の現代川柳は、アメリカの現代詩を探究したエズラ・パウンドの「イマジズム」の「短詩」の構造と手法を現代川柳に導入したものであり、融合文化の一事例として注目すべきものであるといえる。

註

- (1) 川柳文芸は1757（宝暦7）年に柄井八右衛門（1718 - 90）が「川柳」と号して短詩文芸を始めた時に誕生。後にこの「川柳」号は川柳宗家を意味する号となり、明治時代に文芸名となる。根岸栄隆（1888 - 1977）が戦後はじめて、十四世川柳宗家 根岸川柳を嗣号し、東京川柳会を創設。青田昭之（1928 - 2018）は根岸川柳の直弟子で煙眉と号し、2017（平成29）年8月に十六世川柳宗家 青田川柳を嗣号。現在の川柳宗家は十八世川柳宗家 平川柳。平宗星と号した平辰彦（1958 - ）が2021（令和3）年4月、東京川柳会の主宰となり、同年9月に嗣号。
- (2) Ezra Pound (1914) ‘VORTICISM’, *The Fortnightly Review*, September 1, p. 467.
- (3) 岩崎良三訳（1956）『パウンド詩集』（荒地出版社、pp. 28-29.）
- (4) 青田川柳（2018）『十六世川柳 青田川柳作品集 牛のマンドリン』（あざみエージェンツ、p. 45.）

主要参考文献

平 宗星 (2019) 「青田川柳の川柳ベクトル論とエズラ・パウンドのイマジズム」 (『川柳』、東京川柳会、第 301 号、所収、pp. 13-31.)

アンドリュー・ハウエン (2020) 「日本におけるエズラ・パウンドの受容―西脇順三郎から青田川柳へ―」 (『川柳』、東京川柳会、第 303 号、所収、pp. 2-15.)

平 辰彦 「日本におけるエズラ・パウンドのイマジスト短詩の比較研究」 (『北里大学一般教育紀要』、北里大学一般教育部、第 28 号、所収、pp. 79-98.)

付記

本論文は 2024 年 1 月 28 日 (日)、熱海・起雲閣 2 階ギャラリーにて開催された国際融合文化学会の新年例会にて研究発表したものをまとめたものである。